

研究報告

市川本太郎博士著

書評

「原始儒教の道德思想」

本論文は市川博士が過去二十余年の久しきに亘って、原始儒家の思想研究に専念され、原始儒教の道德体系の樹立に努力された苦心の結晶であり、前人未到の領域において不滅の金字塔を打ち建てられた、博士にとっても、中国学界にとっても記念すべき業績である。

本論文の執筆に際し、博士が如何に苦心されたかは、巻末に添付の茫大な使用文献目録を一瞥すれば明瞭である。博士はそれら資料的文献を十分咀嚼し、和漢の参考的文献を縦横に駆使して、論旨適確・記述精緻の本論文の完成に成功したのである。また、本論文の公刊に際し、博士が如何に精魂を傾けられたかは、七一四頁に及ぶ浩瀚な印刷原稿を博士自らの手で丹念に細書し、これを写真版に付されたことによっても推察できる。また、本論文の公刊に際し、博士が如何に用意周到であられたかは、巻末引用文の訳文を悉く掲載されていることによっても窺われる。また、本論文の公刊に際し、博士が如何に遠大な抱負を以て望まれたかは、原始儒教道德の現代的意義を明らかにして、現代日本の家庭・社会の道德的混乱を救い、延いては儒教道德を以て世界道德の根幹とし、人類世界の平和と福祉の増進に寄与しようとの気概を示しておられることでも明らかである。

ところで、博士は本論文の冒頭で、まず、原始儒教の概念を規定して、孔子及びそれ以後の戦国時代より漢代以前に至る孔子学派を指すと述べ、原始儒教の道德思想全般について、系統的研究を試みておられる。今、本論文構造の大体を知るよすがとして、その目次を転載すると、

序論

第一章 原始儒教における道德思想研究の意義

第二章 本書の構想と研究方法

第三章 資料研究

第四章 先秦時代の社会状況

本論

第一篇 儒教道德の根本思想

第一章 天の思想 第二章 至誠論

第三章 人性論 第四章 人道論

第二篇 原始儒教の道德思想

第一章 道德標準論 第二章 良心論

第三章 本務論 第四章 徳論

林 秀 一

第五章 人物論 第六章 修養論

結論

第一章 儒教の目的 第二章 儒教の目標

第三章 周公の思想 第四章 儒教の道德思想とその淵源

第五章 儒教道德の現代的意義

結語

使用文献

別に、巻頭には宇野哲人博士の序文及び自序・凡例が、巻末には周秦時代年表・漢文引用文の訳文が添えられている。

次に本論文を繙読すると、序論・本論・結論の各論に亘って、博士の名論卓説が到るところに窺われるが、筆者の目についた二、三の点についてのみ言及すると、まず、序論第三章資料研究の条で、博士は本論文製作の根本文献となつた詩・書・礼・孟子・左伝・荀子・孝經の諸書に文献学的批判を加え、その成立年代を論定しておられるが、特に礼記の中庸と孟子との両文を比較し、中庸は孟子以後に成立したもので、その前半は子思の作、その後半は荀子と同時代またはそれ以後の作で、孟子に基づいて誠の思想を進展させたものと述べ、朱子の中庸章句第二十章と孟子の離婁章句上篇の両文とを並挙してこれを例証とし、さらに大学の中に誠意思想の存することを指摘して、大学は中庸後半の誠の思想を受けて成立したもので、その年代は早くも秦時代であろうと論定し、従来の大学を曾子及び曾子門人の製作とする通説に反駁を加えておられる点は、博士の創見として注目し得るであろう。

また、本論第一篇第三章人性論で、性善悪説の源流に論及し、詩・書・礼記より引例して、善悪論の史的展開の跡を明らかにし、殊に尚書多方篇の「惟聖閑念作狂、惟狂克念作聖」の二句を善悪説又は白紙説の源流と述べておられるのも卓見である。また、本論第二篇第三章本務論で、東周時代は家族の道德が主であったが、次第に社会的・国家的道德へと進展し、荀子は至って複雑化

したと述べて、儒教の本務体系を明らかにし、しかも、儒教本務体系の中心をなすものは、舜の五教を解明した孟子の君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の五倫説であると断じ、次にこれを分説的に推論して家庭的本務の節で孟子の夫婦有別を解して、乱婚・離婚の原始時代及び礼制頽廢の戦国時代における無別状態に対して有別という第一義の意味と、結婚制度確立後における「女正位於内、男正位乎外」という第二義の意味をも含むと解しておられるのも注目すべき着想である。また、本論第二篇第四章徳論で、孔子の知仁勇三徳、曾子の仁義並称、子思の仁義礼三徳、孟子の仁義礼智四徳目變遷の跡を尋ね、董仲野の五常説への進展に論及しておられるが、特に礼記表記の例文により子思が仁者の仁、畏罪者の仁と、仁に三別あることを認め、これに安・利・強の三品を配当して、中庸後半の生知安行・学知利行・困知勉行への先駆をなしていると推論された点は頗る卓見であり、博士の眼光紙背に徹する読解力の非凡さを物語って余蘊がない。

これを要するに、本論文は従来の研究家が散発的に研究していた原始儒家を中心とする儒教道德の各項目に、抜本的塞源的新味を加え、多くの文献を比較検討して、これに体系的に再吟味を加えられた点で、従来のこの種の論文に見られない特色を見出すことができる。勿論、これを仔細に吟味すれば、論旨の展開に多少の飛躍があり、推論上でも荀子天論篇の「夫是之謂神」の神を主宰神と断定するといった難点があり、性を論じて宋儒の性論との比較が足らず、性についての考察に詳しく情についての言及に乏しいといった部分的微瑕もないではないが、これらは何れも望蜀の歎で、本論の学術的価値を減殺するものではなく、博士が本論文によって学位受領の榮譽に接せられたことは宜なる哉の感が深い。

昭和四十二年五月敬文社刊。B五版。七一四頁。

限定五〇〇部定価六〇〇〇円。

(岡山大学名誉教授・ノートルダム清心女子大学教授・文博)